

教育における Dance の価値

—その1—

太田 恭子

I はじめに

この研究テーマの理論づけへのきっかけは、日本女子体育連盟北海道支部の、毎年例会として行われる Dance の講習会において、はじめて試みられる「Dance の理論」という時間帯を、もったほうがよいという考え方が浮かびあがり、その課題が、まわりまわって研究部から私の所に命令されてきたのである。私は、この課題の大きさに停迷はしたものの、教育の立場において、また生活の中において、創作舞踊の価値に信頼をおき、興味を持ち、苦しみ、生みの喜びを感じて実践してきているものの、ひとりとして、これを機会に論理的に解明して、自分の意識の中に、さまざまな連想が錯雑しているものを、現時点の見解で統一をはかるべきであると考えなおし、諸々の著書の中の共鳴する論旨を求めながら、試行錯誤して、自分なりの概念を組み立て、その第一回の発表を、50年8月17日の講習会で行なった。第1回の発表の論旨のまとめ方への考え方は、対象（聴取者）は、それぞれの舞踊創作への専門家であり、教育実践者であるというたてまえから、方法論や実践例を少なくして概念の中の骨子をまとめ諸先生への思考の一つの刺戟ともなればよいと思って述べたのであるが、結果としては、哲学的な分析であったが「自分はこう思う」と言うことばが、少なかったということであった。その後、この論旨の第2期の模索に入り、論文にするにあたり、その概念づけを、著者の論旨の分析と、実践例との比較の上で書くという考え方に至った。尚、標題に—その1—と記したのは、—その2—を出すかどうかということより、未完成な論文であるということである。特に、ここで「未完」ということばを確認しておきたいことは、論文そのものの未熟さもさることながら、Dance での表現活動は、その特性として、動きを通しての、コミュニケーションであり、その心は、ことばでは表現し得ない包括した意味を持つものであり、さらに、ことばを変えれば、その意識の中にあるものも、身体を通して表現活動である、動きでの創造が定着してくればブリッジ(bridge)の毎く変容し、論理的という、ことばの統一の中にも、また新たな心象を感じてくるからである。

そこで、この課題を、II章としてつぎのような項目を通して分析考察してみることにする。

- 1) 教育におけると言う意味の考え方
- 2) personality との関連における creative Dance の特性

最後に、III章 考察と見解 として、次の項目のもとに まとめを試みたい。

- ① 他の芸術の中での Dance の持つ特性
体育の中での Dance の持つ特性
- ② 生活への適性 (fit) としての Dance

II 1) 教育における言う意味の考え方

戦後の私の教育思想は、その始め、ジョン・デューイ (John Dewey) に依る所が多い。特に昭和 26 年から始めた創作舞踊への、心の興味は「創造性」ということばの持つ意味に強くひかれていたことからである。下の抜き書きは、過去の私の実践研究への意図の 1 例である。

学級経営の実践研究

—主題をもった学級経営の実践—

昭和 27 年 10 月

付属札幌小学校

—34p—

創造性の涵養をめざす学級経営

2 年 2 組 太田恭子

1. なぜこの主題を設定したか。

小学校 2 年生の児童の生活の中心は遊びであり、学習は、ごっこ遊びに大きな興味をもっている。こどもの遊びや学習をみていると、未分化な時期であるが、自己表現が活発で、いろいろな創意性をあらわし、自分で生み出していくことに大きな喜びをもっていることに気がつく。また友達と協力していこうとする態度もみられる。児童は遊び(行動)を通して成長していくのである。民主社会に望まれる新しい人間は、ここから出発させねばならないと思われる。そこで私は、2 年生の学級に、情緒豊かな楽しい生活の場所であり、しかも、創意性をのばすことをねらい、学級経営の方針としたのである。新しい学級指導がこどもの自主性をねらうものであり、さらに学級社会を楽しみ生き生きとしたものにし、こどもの個性を伸してやるためにも、豊かな情緒性からにじみ出る創造性涵養の必要なこのとはうなづかれる。このような創造性が軸になって、一切の学習が進められるようになることを念じ、その姿を心たくしく描いているものである。

2. 具体的実践の場について

創造性を涵養するためには、児童の生活全体（家庭、学校、社会）の広い学習の面から見ていかなければならない。いまここに予想される三つの点から考えてみる。

①社会学習に組まれる面

社会学習における各種の活動は、すべて広い社会生活につながるものであるから、これが最も基礎的な基盤であるといわねばならない。ここで人と人との関係や、人と自然との関係を、優にやさしい感情をこめて眺め行なわせることをねらい、ここからひとりでの各種の表現が生まれ出ることを、導くのである。

②基礎学習に組まれる面

基礎学習の全領域にも、程度の差こそあれ充分織り込まれている。国語学習そのものや、特に作文や、算数のいろいろなごっこ、図工における表現活動、音楽の創造的表現活動、体育の中、特にリズム遊び、模倣物語り遊び等すべて、創造性涵養につらなる学習であり、これらを離れては、どうしても、その成果を期待することは、できない。

③日常生活学習に組まれる面

休み時間の遊び、運動会、遠足、修学旅行、誕生会、学芸会、校外生活、家庭生活、友人との生活など、すべてにわたって、その豊かな情緒性と共に、創造性を培う大切な機会である。

……以上述べた全体について、一応実践しているが、ここでは、それらすべてにふれることができず、その観点をせばめ、体育の中、特に模倣物語り遊び、リズム遊びについての実践記録をまとめ、述べることにする。

——特にこの度は、創作力の前提としての即興能力ということに観察の目的をおいている。即ち即興は創作力の前提となるものであり、舞踊においても、正しく指導することにより、こどもの即興能力を引き出し、これを高めるためにも、大切である。これによって即興的に踊ることが、できるようにするのであるが、あくまでも、踊ることに教育の目的があるのでなく、即興的に行動し、物事を処理し、常に創造することができるようになることに、その目的があるのである——

——以上、抜き書きの一部であるが、いま何故、20 数年前の未熟な実践記録を述べたかと言うことになる。それは、もう一度「教育」という、ことばの持つ意味を確認するために、デューイの「今日の教育」（杉浦宏、石田理訳）を読んでもみると、私の教育思想はあまり変わっていないし、また対象が大学生、社会人であった場合の今日でも、むしろ深めるのみ、即ち努力（Effort）のもつ意味を考えるのみであることに気がついたからである。昭和 42 年、私が札幌大学にきて、一番おどろいたことは、体育を通して見ても、初期、それが、一部ではあれ、学生自身に主体性のないということであった。目的意識もなく、現代社会の現

象としてよくみる無気力、虚無または華美、しらけ、そして騒音などを感じ、教育の場のつまかさねが途中で大学入試のためにか？とにかく、誰のために学ぶのかと云う疑問すら感じた。

現代社会は、体育との関連で概略的に述べても、産業革命、情報化時代、人口の都市集中などによる弊害は、まず運動不足をもたらし、その他、災害、健康疎外、さらに人間疎外、個性の埋没、機械革命による人間の代替可能な職場のシステムと、その余暇の増大、青少年の犯罪、また商業娯楽、マスメディアの発達と手によると本質が全く異った性質のものになりやすいことなど、いろいろ、多くの問題をもっている。体育原理（川村英男著）の中で、ジョージ・ウィリアムス（George. williams）は、現代生活の特性を工業生活におき、それに関する諸問題を体育との関連でつぎのように述べている。

- ① 都市生活（人口集中）一屋内生活の身体的不利、不活発、不衛生的生活
- ② 工場労働—労働の機械化、大量生産と余暇の増大、婦人労働
- ③ 商業娯楽の発達
- ④ 青少年の犯罪

などがその主なるものであるように述べ、さらに、ブッチャーはこの点について、「全世界を通じて、人類は益々無精な生活を送りつつあるように思われる。人間は歩くかわりに乗物に乗り、立つかわりに坐り、参加するかわりに眺める。この無精の結果どんな事になるだろうか？不活動状態は精神的身体的健康に対して有害ではないのか？。多くの書物、定期刊行物、新聞などは、やがて原子力が、現在人間のやっている仕事の殆んどを、やるだろうと宣言している。人間は原子エネルギーを工業に応用することによって生まれる増大した余暇をどのように過ごすだろうか？。青少年の犯罪は常に高い率である。青少年犯罪者たちと、スポーツに関与している青年たちとの間には、どんな関係が生まれるだろうか？。緊張病（精神的）は第一の殺人者である。体育はどうしたら、現代生活において経験される緊張を軽減することができるだろうか？

これらの問題は、人が現代生活に対する体育の貢献を分析しようとするときに起こってくる2～3の例である。————と書かれているが、これらの問題は、アメリカにおける現代社会の問題ばかりでなく、吾々の身近に起こっている、感じて

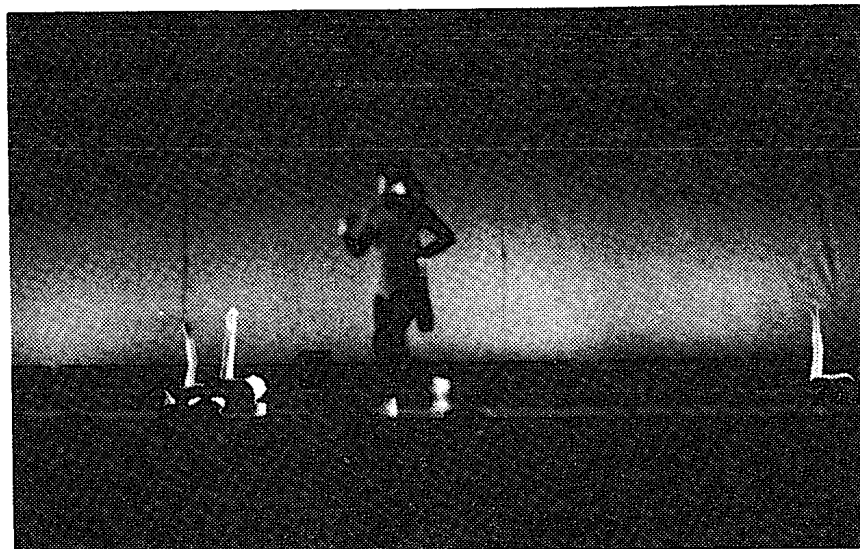
くる問題でもある、と考えたとき、いかに個性のある人間、創造性のある人間、言葉を変えれば、身体活動を媒体とした生命と共に存在する知性的行動的な、そして (feeling mind) 心のある人間性を培うことが、大切な時期であるかを痛感するものである。ここで、ジョン・デューイの論旨を引用すれば——教育とは……の中で……——民主主義ならびに近代産業状態の出現によって、文明がいまからまさに20年後には、どのようになっていくか、きっぱり予言することは不可能なことである。

このことから、児童生徒に、何か明確に一定の状況の型に準備させることは、不可能なことである。だから、児童生徒に、未来の生活の準備をさせるということは、自分自身を統御する力を与えることである。それは彼がすべての彼の能力を完全に、いつでも使用できるように、また彼の目と耳と手が…いつでも自由に使える道具のように、彼の判断力が、その働くべき状態を把握でき、かつ実行力が経済的に、あるいは効果的にはたらくために、訓練されるように彼らを訓練することを意味する。

これは児童生徒の能力の調整に到達することを意味し、そして、この能力の調整は、心理学的という、ことばを考えなければ不可能なことである。心理学的ということばのもつ意味とは、教育とは、あらゆる点で、児童生徒、個人の能力や興味や習慣をみぬく心理的洞察から始めねばならぬ。なぜならば、それは、児童、生徒、個人の日々の成長における持続性を保障する唯一の方法であり学校において与える、新しい観念に過去の経験の背景を与える唯一の方法でもある——とある。さらに、デューイは、教育されるべき個人が、社会的個人であり、しかも社会は個人の有機的なつながりであると信ずる。もし、われわれが児童生徒から、社会的要素を、とりのぞくならば、それは個人の抽象物のみが残こされる。また、社会から、個人的要素をとりのぞくならば、その社会は生氣のない、力のない、集団のみになる。

従って教育は、児童生徒の興味や習慣をみぬく心理的洞察から始めなければならぬ。——とある。これらのことばの中にも体育における、スポーツのもつ、遊戯性、技術性、社会性の価値を感じ、さらに私は芸術及び体育との関連において Dance の持つ特性としての創作活動の価値を感ずるものである。例えば構成の上での独舞 (solo) と、〔動きの合唱〕 (Bewegungschor) と呼ばれている群舞 (2人 Duett, 3

人 Trio, 4人 Quartett, 5人 Quintett 以上——)のもつ。そして、内容的に群そのものの性格の相違がある、その創作プロセスにも、また、作品そのものの中にも、個人の personality の形成への一端としての価値を見いだすからである。



写1. 底流

その3 (日本の情緒)

写真1は、昭和50年11月29日、教育舞踊研究会主催の創作舞踊発表会で、私の試みた、5人(Quintett)の作品の一部である。内容的には日本の情緒(特に生きな女、そして五色の扇の舞うムード、そして底に流れるアジア民族的な宗教心…)のようなものを表現しようと試みたが、動きの構成面で完全に5人の性格を生かした群舞を出すことができなく、4:1の動きのハーモニーに甘んじ空間形成と運動のリズムの面で少々5人の関係の工夫がみられた程度であったが、ひとりの創作者が行うからか、ひとりの創作者が行ってもか、とにかく奇数はとくにむずかしいと感じた。例えばこの5人の関係を、a,b,c,d,eという個性のある各自が、話し合いから、人間をぶつけあって、テーマのある5人の関係の動きVという作品を創り出すということは、そのプロセスにおいて、動きへの思考のみでなく、心(mental, mind と feeling)の葛藤と結合への努力が要求されるものと感じているからである。や、もすれば、a,b,c,d,eという5人の関係は、マスゲーム的、[動きの斉唱]となり得ることが多く、Vという、内容的に別な性格を生み出すことへの努力(Effort)こそ価値あることと考えるからである。ここで事例はさておき、もう少しデューイの論旨を引用してみることにする。

——すべての教育は、個人が社会意識に参加することによって行われる。この過程は、無意識に、殆んど誕生からはじまり、しかも、たえず個人の力をかたちづく

り、彼の意識に浸透し、そして習慣を形成し、彼の観念を養成し、また彼の感情や、情緒を喚起する。

——無意識の教育を通して、個人は、しだいに人類がこれ迄に集積することに成功してきた知識及び道徳的資源の分配にあずかるようになるのである。彼らは、積みたてられた文明資本の継続者となるのである。

——真の教育は、個人が自己を見えだす社会的環境の要求により、彼らの力を刺戟することによっておこなわれる。

——そして教育者の努力とは、

個人が教育者に依存せずに、自発的に進めていく、ある活動と結びつくものでなければならない。そしてこの教育者の努力ということ、私どもの平凡のことばにおきかえれば、よく現場の教師は「生徒で勝負する」という。このことは、その理論の実践によって、生徒の変革が実現されていかなければならぬという語りことばのもつ意味を痛感することからでもある。さらにデューイの論旨の中で、教育の題材ということにふれてみたい。

——社会生活は、すべての彼の努力と、すべての彼の達成したものにかんする無意識的統一および背景を与える。

——学校の教育過程の題材は、社会生活の本源的な無意識の統一から、漸次分化すべきである。

——学科における相関関係の真の中心は、科学でも、文学でも、歴史でも、地理でもなく、彼ら自身の社会活動なのである。——

このことばは、やや、極限的にも捉えられるがこれに類似の考えを私は、ブルナー（Jeromes. Bruner）の著書、創造の条件、第四章、知ることの一つの様態としての芸術（Art as a Mode of Knowing）の中でも、教えられるのである。そして私は極めて単純に考えるのである。言語での表現も、身体活動を通しての表現題材も、その題材はあく迄も吾々の生きている社会生活の中からであり、努力によって、社会生活の中に還元することにより、循環によって、無意識の中でその“生への力”が形づくられていくものと考えからである。してみれば、言語は極めて重要な社会生活のコミュニケイトの媒体としての素材であるが、ことばだけでは、機能を通しての、或いは筋感覚を通しての喜びや、悲しみや、楽しみのリズムも感情も湧いて

くることは少なく、身体活動を媒体としての表現活動が身体の中にあるものとは別なものであると感じている。生きている人間の身体 (personality) そのものを媒体とする表現活動は mental (知性) mind (心) と feeling との combination した形で表われたものであれば、社会生活の中での、無意識の刺戟は、心だけのもの、知性だけのものでもなく、その創造への努力は、社会的なものをも受容する、努力そのものにも還元すると考えられるからである。

さらに、ブルナーの論旨を引用すれば

—第四章 知ることの一つの様態としての芸術の中で—

なぜわれわれが、自かやら進んで創造への努力をするのであろうか。おそらく、その労に対する報いは芸術を鑑賞するという努力そのものであろう。あるいは、経験の統一がなし逐げられるという——いいかえれば、経験の統一がおのずから進展していくということであろう。趣味はさらにすぐれた趣味を生むものである。ドヴォルザークをよく聴けば、ベートーベンやワーグナーに対する好みも、おのずから伸びていく。かつてカールプューラーは、機能の喜び (Funktionslust) ——機能をはたらかせることのなかに得られる喜び————ということをのべたが、もしその純粹な例であるとすれば、それは芸術の領域にこそ求められるべきであろう。——とある。

このことばが、デューイの、教育の題材は社会生活の中にあるおいう論旨と、どのように関連させるかと言うと、それはことばの統一ではなく私自身の意識の中に、舞踊のもつ題材への意識の中では、教育の手段として Personality の形成に役立つものであると概念づけられる。

以上「教育」という、私なりの考えを、ジョン・デューイ、J.S.ブルナーの論旨に頼りながら、確認し、その上で舞踊のもつ特性が、教育への手段としての価値の分析と考察に入ることにする。

2) personality の関連における creative Dance の特性

私はこのことについて、帰納的方法をとるが、それは、近代舞踊革命家の分析を手がかりに、creative Dance の特性に触れ、そして理解して頂くために努力するものである。

(1) 近代舞踊革命に大きな役割を果たしたのはイサドラダンカンである。イサド

ラダンカンは、自分の個性を十分に生かし、人類のために大きな仕事をした舞踊家である。彼女がその偉大な仕事をなしとげたことには、一つは、イサドラダンカンが強い意志の持ち主であったと言うことと、小さい時の社会的環境、母親の（ピアノ教師）理解と協力にあった。

他の一つは、サンフランシスコが生んだイサドラダンカンであったが、当時、19世紀は、ヨーロッパが彼女の個性を充分伸ばす条件を与え、それを認める寛大さを持っていたためと伝えられる。

イサドラダンカンは、サンフランシスコに生まれ、家庭の事情で母親がピアノの教師をして生計をたてていた。貧乏な彼女の母親は4人の子どもの遊び場に困ったあげく、イサドラダンカンの年令をごまかして5歳で早目に学校にやった。しかしダンカンは学校の授業がつまらないと思ひ、型にはまった学校では、人間は決して偉くなれないと思ひ、彼女は学校よりも家に帰って夜毎に、母親の聞かせてくれる、ベートーベン、シューマン、シューベルト、モーツアルトの音楽や、読んでくれるシェークスピア、シェリー、キーツ、バーンズの詩を心から楽しみ、そこからより多くのことを学んだ。6歳になったある日のこと、母親が外出から帰ってみると、ダンカンの家は2歳か3歳の近所の子どもでいっぱいだった。そして、ろくに歩けもしないのに皆は腕を振りとびはねたりしていた。母親が驚ろいたことに、ダンカンは一生懸命にその前にたって子ども達に教えていた。そこでその意味をさとした母親は、さっそくピアノの蓋をあけて伴奏をはじめた。これが近代舞踊学校の始まりであったとも伝えられている。その後イサドラは、人々にすすめられてバレエ学校にも通いましたが3日でやめ、彼女のこの頃の自叙伝の中に「私はけいこ場の真中で、長い時間、時には昼も夜もなく研究し、探し求めました。本当の舞踊、それは吾々の身体の運動という手段によって人間のたましいの聖なる表現であらねばならないことがわかり、その舞踊を探し求めました。バレエ学校では、生徒に、運動のもととなるのは背骨のつけねの真中からだを教えます。そしてこの軸から脚や腕が自由に動くのだと説明します。彼らはこれをあやつり人形にたとえています。しかしかかる方法では人為的な機械的な動きしかできず、そしてそれは吾々の魂にとっては何の価値もないものであります。これに反対し私が探し求めていたのは身体という管に、躍動する光をもって流れ込むところの精神的な表現の源であったのであります。数ヶ月後、私はこの一つを中心点に私の全力を集中し、そして音楽を聞くとそこに音楽が流れ込み、魂が鏡に映るところの精神的な幻想を発見し、この幻想から私の舞踊が生まれるこのとがわかりました。

——今、ここでダンカンの生い立ちをあげたのは、一つは、先に述べた、ジョン・デュイの教育の題材の中で——社会生活はすべての彼の努力と、すべての彼の達成したものに関する無意識的統一とその背景を与える。——

という論旨が関連づけられる。19世紀ダンカンにとって学校教育は、教育の場ではなく、はじめは小さな社会の家庭、母より夜毎に聞かされる音楽や詩が、ダンカン

の心をとらえている。更に成長してからは、生地のサンフランシスコでなく、ヨーロッパの環境がダンカンの教育のコミュニケートの場であった。と考えられる。

他の一つは現代の教育の中で創作舞踊は、方法論が数多く、や・もすれば停迷へと見られる点もあるとき、その方法からの脱皮は、もう一度、イサドラダンカンの自由な舞踊の精神にもどるべきと考える、感ずるものがあるからである。

自叙伝の中で、イサドラダンカンは「私は小さい子どものクラスの前に立ってこう申します。あなた方の魂をもって、音楽をききなさい。さて聞いていると、あなた達は、あなた自身の奥深く内面的に自身が目覚めるのを感じませんか？即ち、その目覚める力であなたの頭があがり、両腕があがり、そしてあなたは、光に向かって静かに歩き出しませんか。そうすると彼らは、よくわかったと言います。この目覚めが、舞踊における第一歩であると思うのであるが、その結果イサドラの舞踊は非常に精神的なそして自由なものになった。こうして彼女は、ショパンのプレリュードやグリユックのオルフォイス等の音楽をもとにして、イサドラダンカン独特の舞踊をつくりはじめた。彼女は、ジャンジャック・ルソーとウォルトウィットマンとニーチェを崇拝し、その創作舞踊の師とした。未完成ではあったが、彼女の舞踊は、ギリシャの肉体文化のルネッサンスとして識者から大きい注目を拂われるようになった。

——と記されてますが、私はその刺戟が、音楽だけとは考えてませんが、イサドラダンカンを引用してみても、教育の手段としての Dance が、芸術及び体育の中で、価値づけられる特性は、この心の目覚めで身体が動かされていく（心で踊る）所でないでしょうか。非常に原始的なことばのようですが、この、心の目覚めで踊る。心の目覚めで、身体が動いていくことは、舞踊が創造への条件として持つ最も大切な所でありましょう。そうして、舞踊がもつ Personality の形成への手段として価値づけられる点でもあると考えるのです。

(2) ルドルフ・フォン・ラバン (Ludolf von Laban) への分析

すべての芸術には法則があるように、近代の舞踊革命も、芸術としての舞踊の法則を研究することによって、実現されてきたのである。イサドラ、ダンカンが叫んだ近代舞踊革命は、ラバンによる、新しい体系づくりによって実現したものである。ハンガリア生まれの、ルドルフ・フォン・ラバンも、彼の一生の仕事の大部分はドイツに於てであり、当時のヨーロッパの創作舞踊家の著名な者で、ラバンの教えを受けなかった人がないほど彼は、すぐれた教育家でもあり、メリーヴイクマンもかつてはラバンの指導を受けた人であり、ラバンの研究をメリーヴイクマンの創作活動によって実現化し一歩前進させたと言われてもいる。ラバンは運動の分析からと

りかかった。自然運動の法則は、ボーデやメンゼンディクやデルサルト等によっても研究されたが、ラバンの功績の大きい、舞踊身体育成法 (Tanzerliche korper bildung) も、ラバン、ヴイグマン、トルッピエなど数人の舞踊家ならびに体育家の手により、合理的に組みたてられ、自然運動の法則と表現力のある身体づくり教育法として有名である。さらに、なんとといっても、ラバンの最大の功績は舞踊が時間芸術でなく、空間芸術であるということの発見である。が、この偉大なるラバンの研究の引用から述べたいことは、この彼が Modern Educational Dance という著書の中で

①教師は学校において Dance のなんらかの計画をするまえに、自己発達における本能的な Effort を理解しようとつとめることは有益なことでしよう。と述べている。

※註 ここで Effort ということばは Laban も姿勢とか努力ということへの解釈から述べているが、私が Effort に対する解釈がまだ未熟なため、ブルーナの論旨を引用した上での解釈を進めたい。

第四章 知ることの一つの様態としての芸術

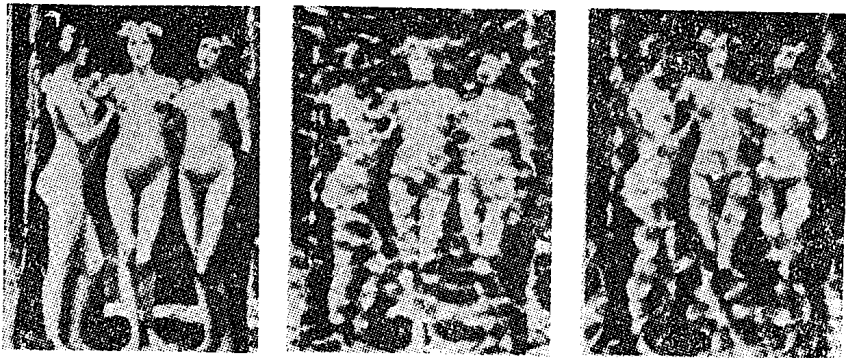


図4 ポナンコントル作「三美女」, ロンドン ソホー画廊蔵。
右の二図は波形ガラスを通して再生したもの。(“Psycho-
analysis and the History of Art,” *Int. J. Psych.*,
1954. による)

美術史家アーンスト・ゴンブリッチ (Ernst Cronbrich) は、イギリスの精神分析学者の御歴々の席で講演したとき、芸術作品が美の喜びにおいてどんな役割を果すか、それを強調せんがために興味ある例を用いた。すなわち、かれはポナンコントル (Bonnencontre) —19世紀後葉におけるフランス、アカデミー派の技法の典型—の筆になる、ごくありふれたアカデミズムの絵を示したのである。(図四)これは一見してわかるように、見る人を喜ばせたり、感動させたりするほどの作品ではない。さて、ゴンブリッチはこの絵を波のある透明ガラスで蔽って一同に示した。このガラスの効果で、型にはまったフォルムと平板な絵の表面はこわされ、ちょうどジョン・マリン (John Marin) が水彩画でやろうとしたのと同じような効果を生じた。それはまったく驚くべき効果であった。絵は今や感興をそそるものとなったのだ。ちょっと努力を加えれば何かが生み出されるのだ。しからばその努力と

は何か。それは芸術品の特徴たるあいまいさを解明するため、常套的なやり方で、字面通りに、見たり聞いたり理解したりする——そんなやり方を脱却する点にあると思う。しかしそれだけではない。それは、もっと深い意味では、さまざまな見方を新しく結び合わせる努力でもある。ゴンブリッチの使った手法のおかげでボナンコントルの描いた像を、安易に、描かれた通りにみる見方は避けられ、鑑賞者は比喻にもとづく見方をとらざるをえなくなった。エルグレコ作の枢機卿の姿に敬虔さと残忍さを二つながら見え出すというときにも、同じことが起こる。そのさいわれわれの心に感じるのは、結びつけようとする努力である。われわれが多様の統一 (unitas multiplex) という表現を適用しなければならないのは、単に芸術作品の創作についてばかりでなく、それを認識する経験についても同様である——これの適用ということで——考えたい。

② Dance の動き (Movement) は、日常に使われている動きと基本的に同じである。training は pupil を、気楽に多少の随意 (自発的の) または、無意識の衝動にも、従うことを敏捷にできるようにしなければならない。

③ 運動への衝動はどこから起こるか？

私たちの手や足などを動かす神経や筋肉に与えられた impuls (刺戟) によって、我々の関節や筋肉が動いて、動きたいと言う内的な Effort が生ずる。training の際教師は生徒及び学生の運動衝動を Stimulus (刺戟) しなければならない。

さらに、教師はその際、内的エフォートの違った性質から違ったタイプの動きが生ずることを系統的に研究しなければならない。 (太線は今後の課題)

と述べ、さらに少しとびますが Laban の 16 の基礎運動のテーマの中の

.....

16. Movement の mood や expressive (表現) の qualities (質) に関するテーマの中で、

ことばが、字で表わしてあるように、またことばの組み合わせでできるように、Dance のフレーズの決定的なもの (よりよい Dance のフレーズ) は、より複雑に多くある movement の中で、simple な motion の elements (要素) の調合の中にあると述べている (私なりの解釈であるが……)

それは movement の組み合わせは、ことばのフレーズに主語と述語があるように、ではなく movement の組み合わせは自由である。唯一つの action moods (ムードある動きのことば) の movement のフレーズは、その運動のフレーズがどのような雰囲気を表わすかという意味でわかってほしい。しかし、モダンダンスの研究で、色々と研究された結果、ある一つのムードある action (動きのことば) による movement のフレーズは、ことばを変えれば Dance は emotion (感情、情緒) を表

わしただけではない。色々と違った intention (意志) が、人の身体の中に芽生えた、心的 (mental) な Effort が、筋の通った順序で arranged されてできた、動きのことばのフレーズだと考える。従ってその組み合わせ方に意味や、妙味があるので、ことばを変えれば、子ども、生徒、学生個人にとっても、Dance とは mental とか mind と feeling emotion と operation bodily の3つの powers の co-ordination あるいは、combination からくる mood ある action による movement の、フレーズへの Effort である。そしてその動きの結果、生ずる3つの powers の co-ordination に対する Effort を、実際の Dance の創作過程の中で認めることになる。これが、子どもから生徒、学生、社会人であっても、その personality の発達に対する重要な経験となると考え、そして感じているものである。Laban はさらに、この3つの powers の co-ordination は、小さいときから、3つの powers の combination で練習する。はじめは意識せず、無意識に、大きくなるにつれて、これを意識していく—と、記されているが、このことはイサドラダンカンの心の目覚めで身体が動いていくということ、大切にするという点では関連があるものと考えられる。Laban によって、この mood ある action を、そして多くある movement を、どのように simple な motion と elements の co-ordination に Effort するかということの方法論も示されているが、これらは、方法論に入るので、次の課題になる。ただ、わかっていることは Dance が一つの action の組み合わせを、どのようにやるとき、どのようなムードが、できるかと言うことは、いつも、わかってない。経験への creative でもあるということである。

(3) マーガレット N ドゥプラー (Margaret N. H. Doubeler) への分析

舞踊学原論 (松本千代栄訳) —創造的芸術経験—著者は、現在のアメリカのウィスコンシス大学の準教授で、生理学者であり、哲学者であり、舞踊教育家である。彼女の論旨 (personality との関連から) は、人生は誕生から死に至る迄、一連の変化ある行動のパターンであり、人間の文明における成長は、人間の意識の成長であるように、精神の、知り、決意し、想像し、創造し、実行する能力に依存する。この教育者たちもベタゴギックなお説教よりも、もっと必要なのは自己活動 (self activity) を起こさせる知的な刺戟であることを認識しなければならない。そして教師は学習者の興味の中にこそ彼らの欲求や能力を知る手がかりのあることを知って

いる。

・教育は、個人の能力を供給することはできない。それは生まれつきなものである。学習者に自分自身を開発する機会を、与えることによって教育することである。

・さらに、教育には2つの相がある。

一つには受け入れる (to take in) 能力、即ち印象づけられる能力であり、

他の一つは、外に出す能力 (to give out) 即ち表現する能力である。これを変えれば、印象を受けることは、精神を活気づけるが、これらの精神の反応を表現することは、あらゆる精神的諸能力の調整力と、協応力を必要とする。さらに表現することへの価値について、

・経験を知覚し評価する力は、高度な能力であるが、しかし実行に移さなければ殆んど役に立たない。

・単なる知覚と、知識の理解だけでは、精神を最高度に発達させるには不十分である。

・知るということは、必要不可欠な第一段階であるが、性格や、価値感覚を発達させるものは、自分の知っていることを表現させることである。

・われわれの考える personality の開発とは体験を通して、自身の本質や、思想、情意、意志の世界をつくりあげていくことであり、知覚、直観、観念の世界を通しての調整力と協応の反応を表現し、この経験の、新陳代謝がなければ personality がそこなわれる。特に現代社会の産業革命、情報化時代には、多くの利点と共に弊害もあり、自己の内面性の開発が阻害されやすい時においての、表現活動への価値を述べ、教育すること、そして personality の開発、それは知ること、感じること、想像すること、創造すること、即ち表現することへの新陳代謝によって創りあげていくものであり、彼女はその価値を高潮させ、ストレートに、それが最もよくできるのは、舞踊であると述べている。このことばは、少々走り過ぎの感じもあるが、舞踊教育の大きな目的は、意識的体験による personality に寄与するものである。舞踊教育は身体的な、もののみならず、情緒的、知的、精神的なものでなければならぬし、舞踊が表現の適切な手段として経験され、知的、情緒的、精神的な動きが、身体活動とよく協応するとき力動的な運動表現が生ずる。これが舞踊教育の特性であるが、その目的に向かって進めるためには、生得的な能力と衝動という基礎の上

に築かなければならない。そうでなければ真に知るとか、情緒的とか、あるいは、芸術的成長は全くあり得ないと考える。と述べている。

III 私の考察と見解

(1) Creative Dance のもつ特性

体育、スポーツ及び芸術における創造性への経験が如何に人間の personality の開発にとって価値あるものであるかは、上述の中にもあるごとく、また多くの芸術家、科学者、見識者、或いは実践教育者によって、それぞれの特性を通して証明されてきている。そして、それを意識の中に感じとっている人は、天才、凡人の如何にかかわらず、幼少、老令の如何にもかかわらず芸術の世界、科学、或いは、体育、スポーツの世界、社会生活、家庭生活のあらゆる場面で展開されている。そして、これはアメリカ、ヨーロッパにのみその始まりを見るものでもなく戦前、戦後を通して、日本でも、古くから、歴史的、古典文学その他によって行われてきている。また踊りの世界でも、能、雅楽、日本舞踊、民族舞踊（郷土舞踊）など、家元形式、あるいは、何らかの形で、その文化遺産は伝承され、今日でも、古典舞踊として存在している。私どものねらう創作舞踊も日本の民族性に立ちもどって、日本人の心、また、日本の女、残り少ない日本の自然風景を素材とし、古典の中でも、学び、そして現代社会の人間として現代感覚の中での、私達を表現してみたいと考えながら、少し試みている古今でもある。いずれまたこの実践結果の発表ができることを、楽しみながらも、現在これらの経験を通してみても、やはり先ず他の芸術の中での現代における creative Dance がもつ特性を見つけねばならぬ。また、日本の教育行政の中では Dance は、体育の中に位置づけられており、また Dance は体育の中にあつてこそ、その真価を発揮できるものと考えているとき、体育の中での Dance の持つ特性も書かねばならないと考える。しかしこの問題は、私の研究の未熟と、時間的なもの、現在のもつエネルギー的のことから、その多くを語らず、骨子のみとし、或いは imagination のみとし、これもまた学問的には、何んらかの形で、他の分野の専門家との協力の上での比較研究を試みざるを得ないとも考えるが、反面、むしろ、協応した上での比較と構造化とでもいう形で、生み出していかねばとも考えている。何故ならば人間の身体は一つであり、Dance は、表現の媒体が body であるという単純な考えでなく、その心は、リズムに昂潮させれば、運動のリズム、空間

のリズムを生むものでもあり、手近な、つづみや太鼓を表現の媒体に使えば音 (Sound) のリズムに定着しこれが神経をも刺戟し、その響きは心をとらえ、またよい音楽を聞けば心がなごむものであり、音楽は運動を誘発するものであり、心が音楽 (music) メロディーを生むものでもあり、これが純粹音楽への世界へと発展するものと推測される。

また、ことばの持つ刺戟も大きく、ゲーテほどの大家が、おのれの内なるものが深いものであればあるほど、ことばとの格闘があり「ドイツ語が言うことをきかない」と言って内と外との対立の矛盾に頭をかかえているという、文もあり、私のように文筆の力のないものには救われることばでもある。が、心が、ことばを生み、文学に発達するものと考え。また私は最近、心が color (色) を生むものだと言うことに気づきだしている。そしてその color (colour) がキャンパスに表現されて絵を生むものであり、その form が彫塑などの美術の世界に創りあげられていくものと推測する。

心が、素直に運動を生んだ時に Dance に発展するであろうと考える。それには mind mental と feeling emotion と operation bodily という3つの power の coordination あるいは combination からくる mood ある action による movement のフレーズによる発展が Dance の特性であるという Laban の論旨に一致するものであり、そしてあく迄も現時点での自分の身体の中に芽生えた心(衝動)を起点とし、筋の通った順序での動きのフレーズへの Effort が Dance への経験として大切なものであることと考える。この時、それが私ども、いわゆる大人であれば、その経験によって、心の空虚さと心のはずみ、そして反対に心のままに動かない神経と筋肉の愚鈍さ、またそのフレーズの構成に、知性と Effort のへの未熟さに気づき、連続して踊る中で、或いは思考する中で、その統御と進展に努力することになるのであるが、Dance の経験の浅い人、または、生徒、学生であれば、彼らの中に、教師は、どの点に、刺戟を与えなければならぬかに気づかなければならない。そして、その刺戟は、音楽でもあり、ことばでもあるが、Dance の中では運動による刺戟を与える事が、彼らの心を開くのに一番早いことに気づくのである。

そして教師の与えた運動刺戟は、彼ら個人にとっては、一時的思考への刺戟として留まるのみで、彼らの中には、彼らの心で踊る運動が生み出されてくることに気

づくのである。

ここで何故 Dance の教育の中では、運動の刺戟がよりよい方法であるかということとは、Laban のつぎの論旨の中でも言われている通り Dance は、movement への Effort だからである。

Laban の論旨——

—運動の現代的形式を研究するものは、現代の工業文明の中で発達した運動の多様性に応じたあらゆる形態とリズムを考慮しなければなりません。日常生活での運動は、生活の実際的必要に関係した仕事に成就して向けられています。一方 Dance と games とは、この実用的な目標はそれほど重視されなくなります。日常生活での運動では、精神が運動を支配しますが、Dance や games の場合は、運動が、精神活動を刺戟します。現代の Dance の教育では、運動が精神活動に及ぼす刺戟の力を、知ることに基づきおこななければなりません。——とある。

そうして、それは Dance が一つの action の組み合わせを、どのようにやるとき、どのようなムードができ、自分にとって、どのように、心が開いていくかということが、わからない経験への creative であるという特性をもっているからだとも言える。これがまた体育の中で、スポーツのもつ遊戯性、技術性、社会性等のほかにも Dance のもつ特性なのである。

スポーツは、このように Effort すれば、このような結果が生み出るという予想と、希望への快感のもとに training され、思考され、経験されていくものとみている。

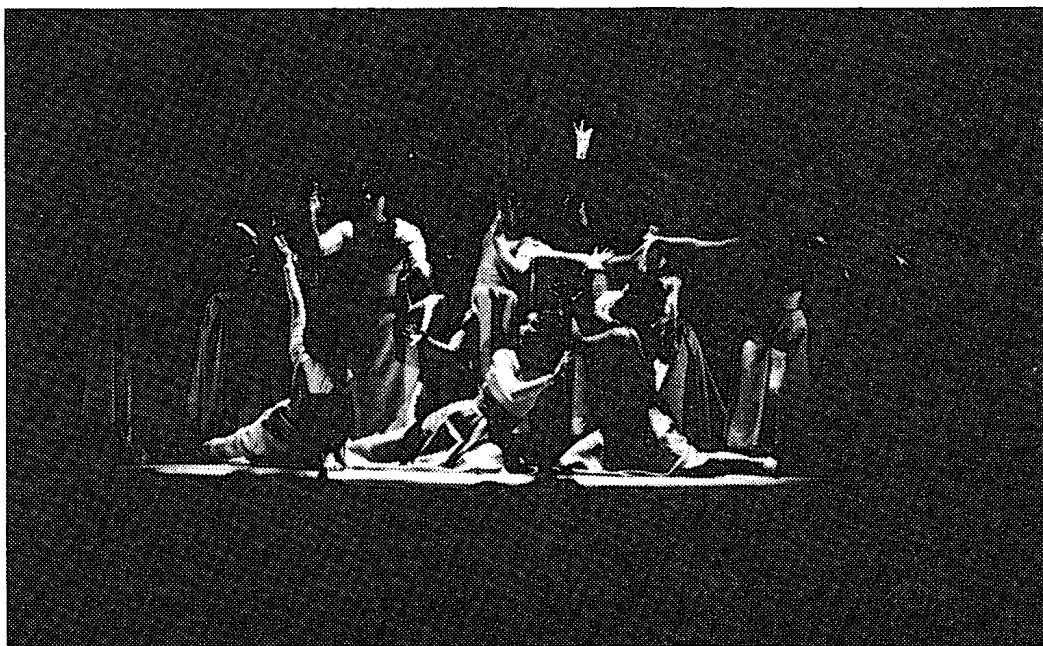
(2) 生活への適性 (fit) としての Dance

身体適性 physical fitness という問題も決して新しいことばではなく、スタインハウスはその著書の中で、ひと口に云えば「人間の精神と肉体が現代生活の中に Fit (適性) するという意味で、健康を無視して体育は成り立たない」をいっている。また、50年9月大阪体育大学加藤橋夫教授は私立短大体育担当者研修会の講演の中で、

身体適性とは、訳すれば、fitness ですから適性でいいわけですがけれどもさで中味は何かということがよくわからないわけです。昭和26年にガリオア資金の援助を得ましてアメリカへ3ヶ月—これを機会に physical fitness とは何ものかを掴んでこようと、例のイリノイ大学の physical fitness の大家であるキュアトンに会うことができまして内容を詳しく聞いたわけですが——我々がわかってきたことこの physical fitness は筋力パワー、持久性、持久力、こういうものを外形として引き起こすにたる基本的なものは筋力パワー持久力である。そういう基本的なものを測るのが physical fitness であり、その方法は筋力パワー持久力に調整力を加わるのです。こういったものを加えて

くると、バランス、敏しょう性、巧ち性とかが調整力として加わってくる。こういうものを総合して physical fitness という言葉で表わすということがわかってきました。—————（引用）

という感銘する論旨を聞いて本質的には、全く Dance が考えている身体適性と同じであると実証されました。そうして、それは何らかの形で、それぞれ、運動負荷を与え training することであり、Dance ではそれは Effort することへの代喩に、解釈し、その中で、Dance のもつ経験への価値は body training のみでなく、Dance を経験する運動のリズムの中でも、心臓の鼓動とともに、自然の法則で、筋構成、神経回路が高まっていくもので、その人にあった身体の形成として、大いに価値を認めるものであるし、また実証してきているものでもある。東京学芸大学、波多野義郎先生、小野三嗣先生などによっても、また、体育科教育（1975 11月号）「リズムからみた科学と体育指導」の中にも論ぜられている。次回に私どもの実践研究の結果も述べたいとも考えている。このように、体育の中での Dance が body が媒体となる、表現活動であることは、身体適性としても、それが正しく行われた時には価値づけられるものである。マーガレット・ドヴラーが舞踊学概論の中でも、教育とは、よく適応した、有用なバランスのとれた個人を結果として形成するように、Dance は人間の能力や力の統合を開発する。われわれは、自身の中に平和を見出し、またわれわれ周囲の生活に対して、適切な適応を見出そうとする願望は、あらゆる精神



写2 いけ花

（おかあさま方）

的、肉体的活動の基礎であると考え。——とある。 写真2は

真駒内健康美運動教室での、おかあさま方が、50年11月29日(土)、教育舞踊研究会、創作舞踊発表会の第1部で、“いけ花”と題して踊った最後のフォルムである。この作品の内容は、優雅さと、コミカルさを、踊りで生ける、おかあさま方の心であるが、これは、日常ふれ合いの少ない、家庭の主婦11人が、わずか4回の練習(60分×4)で踊りあげた、つくりあげたものである。結果としては、見てくれた人から、心の喜びが伝わってきたとの好評をもらい、出た人、踊った人々にとって、非常に喜ばしい感情と、心へのはげみとなったようである。更に、あらたな問題意識も感じとったようである。それは、group 創作なので、11人の考えが動きとなってまとまっていく、感情の統一への努力の過程から、それぞれの自己の心の中に感じとったものは、人間関係のむずかしさでもあったようである。また、新らしく、身体の中に芽生えた心の開きは、自分への、生活へのはげみともなったようである。そしてもっと身体がよりよく動くようになりたい。動かしたい動くことへの楽しみと努力にも、つながったようである。

あとがき

・この論文を出すにあたり、提出期限を、調整してくださった、紀要編集の先生方へ、感謝の意を表わし、また、この論文への努力の刺戟を与えてくださった、女子体育連盟の研究同人の方々にも感謝しながら、エネルギーが仕事を成しとげることへの、心要なことをも感じました。

・最後に、この論文への姿勢に対して指導していただきました、教育大学札幌分校、原崎正教授にも、感謝いたします。

参考文献

- ・今日の教育、デュイ 杉浦宏、石田理訳 明治図書
 - ・体育原理 川村英男著 体育の科学者
 - ・直観、創造、学習 J. S. ブルナー著 橋爪真雄訳 黎明書房
 - ・Modern. Educational Dance. Rudolf Laban.
 - ・現代の教育舞踊 ルドルフ・ラバン著 須藤智恵、秋葉寿子訳 明治図書
 - ・舞踊学原論 M. N. ドヴラー著 松本千代栄訳 大修館書店
- 創造的芸術経験—
- ・舞踊 邦正美 体育の科学社

札幌大学教養部・短大部紀要

- ・舞踊創作の理論と実際 渡辺江津著 明治図書
 - ・新しい健康づくり（現代人のフィットネス理論） 波多野義郎著 日本YMCA同盟出版社
 - ・日常生活の健康の長期計画 加藤橘夫 日本私立短期大学協会
 - ・フィットネス，新しいからだづくり，A. H. スタインハウス著，高倉正治訳 体育担当者研修会
報告書
 - ・体育科教育 1975 11号
——リズムの科学と体育指導—— 大修館
 - ・真駒内健康美運動教室 川端ひろ子（藤大学），布上恭子（道女短），太田恭子（札大）の共同指導。
- 註 図4 ポナンコントロール作「三美女」……J. S ブルナー書 橋爪真雄訳 黎明書房